

〔書評〕

村田 真一

鈴木耕太郎『牛頭天王信仰の中世』

本書は、牛頭天王信仰のほぼ唯一と言ってよい専論の研究書である。本書評にあたり、まずは議論の全体像を把握するためのガイドラインとして各章の概要を示し、本書の評価、疑問点や課題を考えていくことにしたい。

* * *

具体的な分析のはじまりとなる第二章「祇園社祭神の変貌」では祇園社祭神に関する知の創造・共有・変容を捉えるべく議論を展開する。平安時代の祇園社祭神説を確認した上で、とくに鎌倉時代中期『釈日本紀』の卜部兼文、室町時代中期『公事根源』『日本書紀纂疏』の一条兼良、室町時代後期『神書聞塵』の吉田兼俱、これら『日本書紀』注釈の言説を中心的な分析対象としている。

第二章で大きな論点となっているのは、「牛頭天王とは祇園社祭神である」といった捉え方は極めて一面的であり、

多様な牛頭天王信仰のあり方を狭めてしまう（p83）という問題意識に立ち、祇園社と牛頭天王の関係を前提にするのではなく、祇園社祭神をめぐるあらわれる多様な言説の位置をそれらの相互関係から測っていくことである。

祇園社祭神として平安時代の記録等には「祇園天神」と「牛頭天王」が見えるが、鎌倉時代初期頃成立の『伊呂波字類抄』には牛頭天王の異名として「武答天神」があらわれる。そして、『釈日本紀』所載の『備後国風土記』に「武塔神」とスサノヲの同体説が初例として確認できるが、『釈日本紀』兼文説では、それが「祇園社の本縁」であるとし、はじめて武塔神とスサノヲを同体とする祇園社祭神説を示した。

次に、兼良の『公事根源』では、祇園社祭神はスサノヲの「童部」であり牛頭天王とも武塔天神とも言うとしてお

り、スサノヲと祇園社祭神の親子関係に特徴が認められよう。ところが、『日本書紀纂疏』で兼良は祇園社祭神をスサノヲの「化述」としている。ここではじめて「祇園社祭神・スサノヲ・牛頭天王・武塔神がそれぞれイコールで結ばれる」のであり、「牛頭天王とスサノヲの同体説の初見は『纂疏』ということになる」(P146)。

『神書聞塵』の兼俱説では、牛頭天王・武塔天神に加え、盤古や金毘羅神までもスサノヲの異国での名であり同体とされるに至る。「ここには、仏教や儒教は枝葉・果実であり、本朝における神道、それも「元本宗源神道」こそが根だとする「根葉果実説」を唱えた兼俱の考えが反映されている」(P156)のであり、「それは三教一致、三国一致の書としての『日本書紀』という兼良の視点があつたからこそ、成立した」(P156)と本書は位置づける。兼俱にとつてスサノヲこそが「祇園の感神院」の主たる祭神であつたが、それは牛頭天王をはじめとした「異国の神」がスサノヲだという認識において『日本書紀』の世界」をめぐる「異国までもその外延として捉えた」(P158)ものであつたと結論されている。

ひとまずの成果として、祇園社祭神が牛頭天王に限定さ

れないこと、祇園社祭神をめぐる言説創造に「日本紀」注釈が大きな役割を担ったことが明らかになったと言える。

* * *

では一方、祇園社という限定を外した牛頭天王、その信仰の様相と意義はどのように捉えられるのか。本書の勘所はここにある。第三章「感応」する牛頭天王」、第四章「陰陽道における牛頭天王信仰」、第五章「造り替えられる儀礼と信仰」。これら各章は、すべて祇園社祭神という先入観を排することで捕捉され得る牛頭天王信仰を論じている。第三章では鎌倉中期(一二世紀)成立の『阿沙縛抄』所収「感応寺縁起」、第四章では中世後期成立と推定される『暦注書』『三国相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兔集』『簠簋内伝』巻一、第五章では文明一四年(一四八二)書写『牛頭天王御縁起』(『文明本』)、それぞれ祇園社祭神とは異なる多様な牛頭天王についてテキストを深く読み解くことで明らかにしているが、これらの議論に共通する問題意識として、牛頭天王という神と宗教者―祭祀者―儀礼執行者の関係に注目する点が挙げられるだろう。

とくに『阿沙縛抄』『感応寺縁起』の分析は、以降の議論でモデルケースのようにも扱われており、『簠簋内伝』

において「新たな力を獲得する」「牛頭天王の成長」が「蘇民将来によつて促され」、また「二六の秘文」「五節の祭礼」が牛頭天王から蘇民将来に授けられることについて、「これと同じような構造を、前章で検討した「感応寺縁起」の中でも確認することができる」とし、次のように述べている。「感応寺開基である僧・老演と、川前の地主神である老翁とのやり取り」につき、「老翁神からの要求に対し、「宗教者」たる老演が応え続けることで、地主神は強大な力を持つ神へと次々に「成長」を遂げ、ついには正(神)邪(鬼)双方を統べるという牛頭天王へと変貌」し、「老演は、地主神から寺院建立の伽藍地を得るばかりか、伽藍神としての庇護、そして最終的には重要な儀礼を授けられている」(P254)のである。この重要な儀礼とは、牛頭天王の子孫であり、老演の「門徒の中」にいる清原氏が感応寺の別当として「天魔波旬荒乱疾病惡瘡発する時」に呪文を唱えること、その呪文「川前天神の御前には七宝蓮華の花開く、現世は安楽、後生は弥勒浄土の其の世まで」であつた。

「感応寺縁起」は「感応寺」の寺号を「天地相応し感応道交す。故に精舎を以て感応と号す」とし、直接には老演に「天地」が「感応」したことを由来として説いているが、

本書はさらに老演と牛頭天王の「両者の交渉は、神と宗教者との「感応」関係によつて成立している」(P204)として、「感応寺縁起」というテキストの特徴を言い当てている。

こうして『阿沙縛抄』『感王寺縁起』の読解から導かれる議論の上で、『簠簋内伝』巻一については、「それまでの陰陽道や祇園社を中心とした牛頭天王とは異なる、新たな牛頭天王信仰」、「天道神Ⅱ牛頭天王を中心とする新たな暦神の起源譚」(P262)として、前半の「起源部」と後半の「暦注部」を関係づけて読み解き、起源部の物語が暦注部の吉凶の根拠となっていることを論じて、すなわちその全体が「新たな暦神の起源を語る「暦神神話」ともいえる」(P267)としている。

さらに文明本『牛頭天王御縁起』については、主に節供等の「既存の習慣や儀礼を牛頭天王信仰の起源に則して語り直し、造り替える」(P303)様相が捉えられる。「文明本」は、たとえば「正月に行われるハレの諸行事もまた、古端将来への呪詛として造り替えている」のであり、「古端将来への呪詛は同時に牛頭天王を祀る儀礼としても機能」(P295)する。「蘇民将来符を装着し、「鬼払」に参加すること」(P297)は古端将来を呪詛し、牛頭天王の眷属となり加護

を得ることを意味するのである。しかも「文明本」は特定寺社の縁起ではないことが指摘されている。それは、地域的共同体、いわゆる民俗社会における牛頭天王信仰の様相をあらわすものと言え、その先には地域社会に関わる宗教者や儀礼の意義を問う可能性が開かれてくるはずである。

以上、牛頭天王信仰の中世そのものとして、『阿沙縛抄』『感王寺縁起』、『竈竈内伝』、『文明本』の三つのテキストを中心に、その様相と意義をテキストの読解によって浮かび上がらせる議論は見事なものと評すべきであろう。こうして本書は、第二章の祇園社祭神論から離れ、多様な牛頭天王を第三章から第五章まで明らかにしている。

* * *

さて、本書は第一章の研究史の把握において、なぜ牛頭天王信仰研究が停滞的状况にあるのかを論じている。その要点は、祇園社祭神・行疫神・牛頭天王を固定的に一致させてきたこと、牛頭天王信仰を神仏習合論によって価値づけてきたことへの批判として提示されている。そこで本書は、祇園社祭神に限定されない多様な牛頭天王について、神仏習合論への批判的方法論である中世神話論によって探り出していく。「中世神話」という方法視座については第

一章に詳述されているが、その問題意識は、前節に触れたように神と宗教者の関係に着目することを一つの基本とする。第三章以下の議論はこの観点に立ち、中心的な分析において牛頭天王信仰の中世という問題を研究史上に打ち立てており、その功績は高く評価されるべきである。ただし、本書には「中世神話」の議論として小さくない問題がいくつかある。次には、その代表として第三章第六節「感応寺縁起」の変貌」以下(P207、P214)の議論を取り上げたい。

第三章で主要な分析対象となっている『阿沙縛抄』『感応寺縁起』は、後に同名の記事として、内容に共通点と相違点の両方が認められる形で『元亨釈書』『塩囊鈔』にも載録されている。当然、それは牛頭天王をめぐる神話の変貌という中世神話論としては格好の分析対象となるはずだが、本書は両書の「感応寺縁起」の読解と位置づけをあまりにも粗雑に済ませている。そのことを『元亨釈書』における牛頭天王の「神力」と「有情の業感」、『塩囊鈔』の「河崎ノ鎮守ハ是祇園」をめぐる解釈から確認していこう。

* * *

本書は、『元亨釈書』『感応寺縁起』の牛頭天王について、

「我に神力有り。能く魔障を除き疫癘を去く」とあるにも関わらず、「確かに疫病の発生源ではあるが、それは牛頭天王の意思とは無関係であることが強調されている」「疫病の発生に対し、神は悉く無力であるともいえる」とする。この牛頭天王を「無力」とする理解は、牛頭天王が吐く「氣」の「其の触るる所、或いは薬と為り、或いは毒と為り、或いは悪瘡と為り、或いは疾疫と為る。皆是れ有情の業感なり。我が強ひて為すには非ず」という記述に対する解釈から導かれたものであろう。本書はこれを次のように理解している。「疫病の被害にあうかどうかは、「有情の業感」次第」であって、「仏教に深く帰依し、信心することこそが、疫病対策になると示される」のであり、「牛頭天王は、疫病発生のメカニズムを一演へと伝えるだけで、衆生を直接救済する存在とはなっていない」という。果たして、このような理解で済む問題であらうか。

「有情の業感」について簡単に確認すると、「有情」とは心の働きを持つ存在、仏性を持つ存在、すなわち煩惱を持ち悟りを得ることで救済される衆生を指す。「業感」とは善悪の行為が因となって苦楽の果報を受けることを意味し、經典類中の用例など難しいところもあるが、ここではほぼ

同意の「業因感果」の略用と見るとすると、そのもう一つの略用が「因果」となる。要するに「業因感果」とは、より一般的な言い方をすれば「因果応報」ということである。つまり『元亨釈書』『感応寺縁起』では、牛頭天王の「神力」が「有情」（衆生）の業因に依じて、薬か病か、という苦楽の成果をもたらす。これをどのように位置づけるのか、今仮に考えてみれば、牛頭天王の「神力」は、業（因）感（果）・因果応報という仏教の真理を薬病という現象として実体化させる存在となっているのであり、仏教真理に近似し一体化しているとも言える。『阿沙縛抄』に見られた清原氏との関係が『元亨釈書』で掻き消されているのは、仏教の因果応報の論理という普遍性を獲得することと引き換えになっっており、そこには仏教神としての牛頭天王の成長・変貌を認めることができる、と論じることができる。

さらに『元亨釈書』とほぼ同内容でありつつ末尾に「河崎ノ鎮守ハ是祇園」との一文を付す『塩囊鈔』の位置づけにも問題がある。本書はこれを祇園社祭神への「収斂」とするが、『阿沙縛抄』に発する「感応寺縁起」の牛頭天王が『元亨釈書』を経て『塩囊鈔』において祇園社の牛頭天王と同体化することの意味、中世神話の歴史的展開という

べきものが問われるべきであろう。すなわち、感応寺の牛頭天王は、「有情の業感」という、一人の宗教者ではなく、遍く衆生との「業感」という普遍的関係を結ぶことで祇園社の牛頭天王へと変貌し得たのである。そこには疫神の牛頭天王だけではなく、「業感」という表現において「感応」の号を持つ縁起の特徴があらわれてはいないだろうか。

本書は、疫神牛頭天王祇園社祭神論の固着を強く批判している。それは章構成にもあらわれており、よくわかる。しかし、中世における「祇園社の牛頭天王」を疎かにしてよいわけではない。むしろ、多様な牛頭天王という立論から、あらためて祇園社の牛頭天王が論点とされるべきである。ともあれ、『阿沙縛抄』『感応寺縁起』の分析が優れているだけに、『元亨釈書』と『堪輿鈔』の読みの乱暴が目立つ。中世神話論として、より細密な分析議論が求められるよう。

また、「有情の業感」と同様、仏教の教理や信仰を表現する言葉への不用意な解釈は、第二章の『中臣祓訓解』の「生死の穢泥」にも認められる。本書は「穢泥」の「穢」に「病氣」なども含まれる(P107)とするが、「生死」の「泥」とは煩惱をあらわす常套句であり、そもそも『中臣祓訓解』は、

(二〇一二)では『釈日本紀』や『祇園牛頭天王縁起』などを「中世神話」として位置づけ論じている。

つまり、牛頭天王信仰研究としても中世神話論としても、縁起や注釈書を対象とすることは新しくはない。もちろん本書の意義はそれだけで否定されないが、中世神話論それ自体に新たな問題が見出されているわけではない。この点は、今後の著者の研究がどのように中世神話論を更新するのか期待したいが、本書が訴える中世神話論の再評価のためには、中世神話論の再検討が必要であろう。そして再検討のためには、中世神話論がどのような方法論であるのか、何をどのように明らかにしてきたのか、研究史的にどのような位置にあったのかをあらためて考えていく必要がある。

(法蔵館 二〇一九年七月刊行 三三一頁 三八五〇円)

穢れを祓うことは煩惱を失くすことだという注釈を本義としている。この点を落として『中臣祓訓解』からスサノヲの疫神化のみを論じるのは恣意的と言わざるを得ない。

中世神話論は、理論的には神と神話の変容を捉えるものだが、日本中世における実態としては、多く、神や神話を状況毎に求められる仏教において価値づけるものである。神仏習合論とは異なるアプローチにおいて、神と仏が交差し合う信仰の表現と意義を読み解くことが、中世神話論の研究史上の価値であることを忘れてはならない。

* * *

最後に、中世神話論の再評価(P319-320)という問題について述べておきたい。著者は中世神話論の再評価を訴えているが、一方で本書は既存の中世神話論にそのまま寄り掛かるのみのようにも見える。牛頭天王信仰についての直近の研究史として、山本ひろ子および斎藤英喜の祭文研究が参照されているが、本書はそれが「祭文に限られている」ことに注意を促し「祭文だけではなく、縁起や注釈書の類も読み解く必要がある」(P63)という。しかし、山本の『中世神話』(一九九八)では「縁起」がその範疇に入ることが提示されており、斎藤の『増補 陰陽道の神々』